# 雑司が谷旧宣教師館だより

第42号
2008年2月1日号



豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒東京都豊島区雑司が谷1－25－5　TEL／Fax (03)3985-4081


## ～地域福祉の先駆者としての宣教師たち～

## 1.リリー・サイパート

百年前の1907（明治40）年、アメリカ人宣教師J.M.マッケーレブはキリスト教精神に基づく青年教育の実践を目指し、雑司ヶ谷学院（男子学生寮）を高田町雑司ケ谷亀原68（現・豊島区雑司が谷1－25－5）に開設しました。

教会を建設し、日曜学校も活発で雑司ヶ谷ミッションとして繁栄し、数多くの宣教師が同地を訪れました。当時のマッケ－レブの自宅が現在の雑司が谷旧宣教師館です。

女性宣教師リリー・サイパートは1917（大正6）年に来日し、吉祥寺へ移るまでの9年間マッケーレブと活動します。サイパートは雑司ヶ谷学院で勤労者や教師のための夜間バイブルクラスを担当します。

サイパートは児童教育に熱心で、敷地内に雑司ヶ谷幼稚園や女性のための訓練学校（雑司ヶ谷女学院）を創設しました。1926年に吉祥寺に移り、1943年に帰国するまでの26年間を日本で布教と児童保育に携わりました。サイパートの活動をご紹介します。

### (1)サイパートの来日まで

サイパートは1890年5月27日アメリカ・アーカンソー州で生れました。テネシー州ヘンダーソンにあるフリード・ハーディマン・カレッジを家政婦等のアルバイトをして卒業し、在学中に大学のチャペルで浸礼（この教派のバプテストは浸礼といいます）を受けました。そこでサイパートは、日本で慈善活動を行っているマッケーレブら宣教師の活動（※）を知ります。

「子どもの頃にリビングストンのアフリカでの生活を読んで、自分もそんな生き方をしたいと決心した。」
と、活動に加わるために来日しました。

（※）マッケーレブは1892（明治25）年より、ホステッター女史やアリス・ミラー女史など女性宣教師とともに、神田や新宿・四谷鮫河橋スラム等で学校に通うことが出来ない貧困家庭の子どもたちに慈善教育を行っていました。

サイパートやマッケーレブは独立宣教師であり、組織の応援を得ずに行った先で自分で開き、資金は個人からの献金が基となります。教会や集会等での支援金を集めも重要な仕事で、サイパートの日本への渡航費用は二ヶ月かかって集められました。

1917（大正6）年10月5日、ワシントン州のバンクーバー（カナダのバンクーバーは、ブリティッシュ・コロンビア州にあります。）から出航し、10月25日に日本に到着し、雑司が谷のマッケ-レブの活動に合流します。サイパートの日常会話は流暢な日本語で、文章を読むことも出来たということです。

### (2)雑司が谷での活動

【裁縫学校】

1918(大正7)年12月、雑司ヶ谷学院の卒業生飯田氏はマッケーレブから資金の援助を受けて、寮制の裁縫学校を開きました。22名の生徒が入学し、サイパートは寮母を引き受け、英語と聖書を教え始めます。

裁縫学校は繁栄しますが、1920年（大正9）

年のはじめ、サーパートは飯田氏がタバコを吸っているとマッケ-レブに報告にきます。その後、厳格なピューリタンのサイパートとそれほど信心深くはない飯田氏はことごとく対立するようになりました。

結局、評判も良く生徒数も増加している裁縫学校からサイパートは手を引きます。間もなく裁縫学校は衰退し、閉鎖されてしまいました。

マッケ-レブは、*"The Cost of a Cigarette"*（「たばこの代価」）で 飯田氏とサイパートの意見の相違を述べています。

【日曜学校】

その後サイパートは子どもの日曜学校を担当し、指導者の育成に力を注ぎました。サイパートの指導の甲斐あって日曜学校の出席率は増え続け、百人もの生徒が通っていたということです。

1923（大正 12）年 12 月、休暇でアメリカに帰国していたサイパートは日本で大地震（関東大震災）が起きたことを知り帰国します。仲間の宣教師たちと上野、本所、深川まで、リヤカーでアメリカから送られた救援物資を配付しました。

【女性のためのバイブルクラス開講】

1924（大正 13）年、サイパートは精力的に活動を行い、自宅（※）で女性のためのバイブルクラスを始めます。最初アメリカ式の裁縫や料理を行い、あとに簡単な聖書概論を学ぶという内容でした。真夏の暑い時期も休むことなく、盛況だったそうです。

（※残念ながらサイパートがどのあたりに住んでいたのかはわかりません。マッケーレブの家や雑司ケ谷学院、この近所の家などさまざまなところに住んだそうです。）

【雑司ヶ谷幼稚園創設】

1924（大正 13）年９月、アメリカの支援者から寄せられた献金とサイパート自身の資金をもとに、雑司ヶ谷幼稚園を開設しました。園児 30 名、保母２名で始まり、月謝のほとんどが保母の給料として支払われたため運営は苦しく、サイパート資金援助を願う手紙を何度もアメリカに送っています。

幼稚園の卒園生は、

「幼稚園は、学年が違っても上下の関係がありませんでした。」（昭和２年卒園）

「幼稚園にはいつもお花があり、グースベリーを食べさせて貰ったことを覚えています。」（昭和３年卒園）

と当時の様子を語っています。

サイパートは支援者たちに雑司が谷での生活の様子と次のように報告しています。

「私は雑司が谷に小さな花壇を作っている。キャベツ、トマト、ジャガイモ、スイカ、メロン、ピーナツ、にんじん、きゅうり、オクラそして日本の野菜を花壇の隣に植えている。」

【女子訓練校の創設（雑司ヶ谷女学院）】

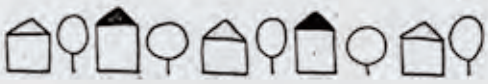
サイパートはかねてより、女性のための訓練校をつくることが夢でした。「聖書と英語、保育、そしてできれば料理と裁縫も教えたい」と、幼稚園保母と日本人伝道者育成を目的とした女子訓練校を開設するために、アメリカに支援者たちに援助を呼びかけました。

1925（大正 15）年の初め、既に廃校となっていた雑司ヶ谷学院（※）を使って女子訓練校を創設しました。人々は雑司ヶ谷女学院と呼んだそうです。

しかしサイパートの情熱と支援者の協力の甲斐もなく、４年後の 1928（昭和３）年、雑司ヶ谷女学院は閉鎖となります。マッケ - レブは、「サイパートはまた不幸にも適任ではない寮母を雇い、学校運営も滞ってしまった。」と書いています。雑司ヶ谷女学院の閉鎖と前後して、サイパートは吉祥寺へと活動場所を移します。

（※雑司ヶ谷学院は1923（大正11）年9月の関東大震災で校舎の一部が壊れ、資金的困窮と学生の風紀の乱れに対し厳格なピューリタンのマッケ・レブは失望し、震災後に学院を閉鎖しました。）

## (3) 吉祥寺での活動



【武蔵野教会の設立】

サイパートは吉祥寺で新たに教育活動を行うこと約束し、支援者に協力を依頼します。1927年11月、東京府下武蔵野町吉祥寺616番地にサイパートはアメリカンスタイルの教会兼自宅を持ち、武蔵野教会と名付けました。サイパートは次のように、初期の活動を支援者に報告しています。

「1927年11月12日、初集会。会員わずか4人。1928年1月、会員1名増。12名が浸礼を受け、合計17名。1929年は3名が浸礼を受けた。当初、日曜学校には50名の子どもが集まり、婦人のバイブルクラスも平均10名集まる。幼稚園を開設し、6名が入園。保母が1人。現在は26名、保母2名。毎月一度、母の会を実施。」1928（昭和3）年には近隣の田無で路傍伝道を開始。現在、日曜学校には150名が集まり、宿舎を広げなくてはならない。」（途中略）

【サイパートの活動と生活】

日曜学校などのサイパートの活動はいったいどんな様子だったのでしょうか。サイパートはともに活動した伝道師・柳内賢正氏の3人の子どもたちを我が子のように慈しみました。長女、斎藤喜美枝さんは、『サイパート先生の思い出』を出版しています。そこから引用しましょう。

「日曜学校では近くの善福寺公園、歩いて20分位かかる井の頭公園にオヤツを持って遊びに行ったりした。大勢の食事やオヤツ等を作る時メイドさんも三人位いたが、サイパート先生は大変だったと思う。

水曜日の夜はバイブルクラスを先生が指導していた。集まるのは大抵大学生（当時は男子がほとんどで女子は大学へなど行かせて貰えなかった。）英語の聖書の勉強である。

クリスマスは1932（昭和7）年～1942（昭和17）年の記憶によると、2～3週間前からプレゼントの相談が日曜学校の教師をやっていた信者とサイパート先生の間で決められた。

日曜学校の出席率の良い子には高額な物を10日位前から新宿とか丸の内のデパートへ手分けして出かけて行き購入した。また出席簿と首っ引きで宛名を書く。多い時には100人分くらい用意しなければならなかったので大変だった。

プレゼントの中身は大体文房具のようなものだったと思う。サイパート先生はあまり社交的な性格ではなくお祭り騒ぎは得意ではなかったようだが、信者達や子ども達を楽しませることに努力は惜しまなかった。雑司が谷や富坂の教会の日曜学校と交流会等をしたこともある。」（抜粋）

【栄和幼稚園】

サイパートは開設した幼稚園を栄和幼稚園と名付けました。『武蔵野教育史』第一巻第六節私立学校に栄和幼稚園についての記載があります。当時の武蔵野町吉祥寺616番地は現在、武蔵野市吉祥寺東町二丁目12～15番地です。ここでも斎藤氏の著作から紹介します。

「吉祥寺はお寺が多いところで、その中の安養寺から500坪位の土地を借りた。サイパート先生と一緒に地代を払いにいったことがあったが、先生は「アンヨージーサンに行きましょう」と言ったので、幼い頃から私は本当にあのお坊さんが「アンヨー」と言う名のおじいさんと思っていた。お寺が教会に土地を貸すという事が出来たおおらかな時代だった。」

【心身の不調と教会の閉鎖】

幼稚園の繁栄とは裏腹に、サイパートは資金不足に恒常的に悩まされていました。活動のかたわらに資金調達や借金返済を行う金銭的ストレスは負担となり、徐々にサイパートの心身をむしばみ始めました。

日中戦争が始まり国家主義化が進行し、政

治情勢の悪化に伴い何百人もの宣教師が日本を発って行きました。その頃にことについて斎藤氏は次のように書いています。

「1942（昭和17）年になると教会は閉鎖同様。別に当局から指令は無かったが信者が来なくなったのだ。幼稚園にはやはり子どもを行かせない家がふえ、1942 年の卒園式があったかどうかよく覚えていない。」

## （4）サイパートの帰国

1940（昭和15）年4月、宗教団体と結社の統制を目的に宗教団体法が公布されます。独立宣教師たちは教団に入ることを拒否し、マッケーレブは日米開戦の間際の 1941（昭和16）年 10 月 22 日、アメリカへの最期の船で帰国しました。

1942（昭和17）年7月、教団に属さないサイパートは強制収容所に連行されました。この年、日米において在留者の交換がありましが、サイパートは帰国を望みませんでした。二度目の在留者交換が行われた 1943 年 9 月 13 日、サイパートは帰国します。10 月 19 日インドのゴアに到着。喜望峰回りで、12 月 1 日、サイパートはニューヨークに到着しました。53 歳でした。

## （5）サイパートの原点

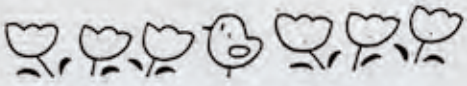
以上、サイパートの 26 年間に及ぶ活動を概略しました。幼稚園と雑司ヶ谷女学院の創設、日曜学校や女性バイブルクラスの活動など、サイパートが主に係わったのは女性と子どもでした。

十人兄弟で苦学して大学を卒業したサイパートは、女性が自立するためには技術習得が必須であると考えていたのかもしれません。サイパートが子どもたちをこよなく慈しんでいたことを誰もが語っています。

雑司が谷では裁縫学校、女子訓練校ともに短期間で閉鎖となってしまいます。しかし幼稚園は経営母体の変遷はあるものの、今も続いています。戦前幼稚園に通えるのは富裕な家庭の子どもであり、慈善活動とはいえないかもしれません。

それでも、サイパートはただひたすらそこで必要とされることを、自分が必要と確信したことを信念に基づいて行いました。

斎藤喜美枝氏の妹、精子氏はサイパートの人柄を次のように語っています。（2003 年 3 月 9 日開催「サイパート先生を偲ぶ会」聞取り）



「サイパート先生は料理が上手でした。食事はアメリカ流。ラードを買っていてラードでパイを焼き、ほうれん草を茹でるときにも入れました。フライドチキンも作ってくれました。牛は食べません。西部開拓時代の食事のようでした。お庭にはいつも花が植えてあり、栄和幼稚園ではスイトピーの歌をよく歌ったものです。最後に会ったのは昭和18年の夏の終わり頃で、先生は特高と一緒に小石川の仮住いに会いに来てくれました。見送りには誰も行けませんでした。サイパート先生は幼児教育に専念しました。生徒を援助して学校に通わせ、そして自分の幼稚園で雇う、まさに育てるという発想でした。」

帰国後、サイパートは故郷アーカンソーの日本人強制収容所で終戦まで通訳として奉仕し、戦後はロサンゼルスの日本人コミュニティで奉仕活動を行いました。

宣教師派遣団を通じて柳内兄弟を探し出します。1949（昭和24）年、長男・秀康氏はロサンゼルスに留学することになり、サイパートと暮らします。

1954（昭和29）年8月13日、サーパート永眠。64 歳でした。

〔参考文献〕
『サイパート先生の思い出』斎藤喜美枝著 ジャパンムック、1998 年
"Lillie's Story" ブレンダ・ニクソン著 2006 年
「先覚者紹介」野村基之著（『福音誌』1981 年～）

**※サイパート宣教師の活動詳細は、豊島区立郷土資料館研究紀要『生活と文化』17 号（2008 年版）に掲載されています。**

【編集後記】

本館建築百年を記念し、マッケ･レブゆかりのベッドが戻ってきました。今後も地域に貢献しながらも埋もれたしまった人や事績を掘り起こしてまいります。情報をお寄せください。（文責・浜地）